

県立大の古生物関連学部新設について検討する有識者会議の初会合＝2日、若狭町の県年縞博物館



新学部「恐竜前面に」

県立大有識者が初会合

対象拡大求める声も

恐竜をはじめとした古生物学関連の学部新設を計画している県立大は2日、新学部のあり方を検討する有識者会議の初会合を若狭町の県年縞博物館で開いた。福井は日本の恐竜研究の最先端で全国的な知名度も高いとして、恐竜を前面に打ち出した学部新設を支持する意見が出た一方、恐竜は古生物学の一部だとして研究対象を広げる必要性の指摘もあった。県立大は新学部について、恐竜など古生物学に年縞に関する古気象学を取り入れた世界的な学術拠点としたい考え。次期中期目標・計画(2019～24年度)での設置を

目指している。有識者会議は国立科学博物館の林良博館長を委員長に、全国の大学教授や博物館長ら8人と、県立大の進士五十八学長ら3人の計11人で構成する。

初会合で林委員長は恐竜に加え年縞や鳥浜貝塚(若狭町)といった福井の資源を生かした新学部を「ぜひつくるべきだ」と支持。東北大学術資源研究公開センターの西弘嗣センター長は「魅力ある学部には学生が集まる。福井の恐竜は全国で知られており、恐竜学を前面に打ち出すのが得策」

と、県立恐竜博物館と一体化した運営を求めた。名古屋大博物館の大路樹生館長は、古生物学を研究するには生物と地球の両方を広く学ぶ必要があると指摘した。県会で指摘されている学生の就職先については「国際的

な恐竜学者と交わることで社会が求めるコミュニケーション力を付けられる」(三重県総合博物館の大野照文館長)などの意見があった。今後2回程度会合を開き、教育研究の対象分野や育成する人材像を詰める。(小林真也)